

人のために生きる

廣瀬 久兵衛

二〇一三年（平成二十五年）、大分県の国東半島・宇佐地域が「世界農業遺産」に認定された。それに伴い、二〇一五年と二〇一七年に、「世界農業遺産中学生サミット」が開催され、認定地域に住む中学生が参加し、先人たちの偉大な功績を学び合った。その偉大な先人の一人が、江戸時代末期に活躍した廣瀬久兵衛である。

久兵衛は、日田の商家「博多屋」を、父から二十一才で受け継ぎ、代官所の仕事を引き受けながら、一方で掛屋商人（銀行のような仕事）として生計を立てていた。

一八二六年、久兵衛は、日田の農業用水路の工事を成功させた手腕を買われ家から遠く離れた豊前海岸（宇佐市、豊後高田市等）の新田開発を代官所から命じられた。この頃、江戸幕府は全国で新田開発を進めていた。幕府は、豊前海岸に広がる土地を開発すれば、年貢米の増収が期待できると考えたのである。このことを知った久兵衛の兄・廣瀬淡窓は、大いに心配し、弟をさとした。

「日田の農業用水路は、人々に多くの恩恵を与える立派な事業だったが、人々の労力や財力を多く使い、不平不満の声があったのも事実だ。今回の事業はさらに難しく、成功の見通しはほとんどない。失敗すれば、人々の不平不満をあびるだろう。考え直した方がよいのではないか。」



※世界農業遺産

その土地や自然環境を大切にしながら進めている伝統的な農業を守っている地域を国連食糧農業機関が認定する仕組み。

世界では十六カ国三十七地域、日本では八地域が認定されている。

淡窓の言う通り、成功する保証は何もなかった。何か問題が起きれば、自分が責任を負うことになるかもしれない。また、自分だけでなく、廣瀬家や家族にも災難が降りそそぐかもしれない。しかし、久兵衛は、兄・淡窓に次のように言った。

「兄上のおっしゃる通りです。しかし、廣瀬家は長い間、代官所に入りし、重要な仕事を任されてきました。また、父から代官所の恩義おんぎを忘れてはならない。家族全員の衣食住は、すべて代官所からもらう仕事のおかげであると言われました。今回の件も断ることはできないのです。それに誰かが、やらねばなりません。」

久兵衛の強い決意を感じた淡窓は、それ以上、何も言わなかった。淡窓は、祈るような思いで久兵衛を送り出した。

一八二六年三月、豊前海岸一帯の新田開発の工事が始まった。久兵衛は最大規模の「呉崎新田くれさき（豊後高田市）」の開発に取り組んだ。久兵衛は、工事現場の近くに家を建てて住み、毎日、工事に現場に足を運んで指揮をとった。昼も夜も走り回り、雨の日は笠かさをかぶり蓑みのを着て、人々と一緒に働いた。こうして、三百四十七ヘクタールの広大な「呉崎新田」は、延べ三十三万人が関わり、三年半かけて完成したのである。

また、久兵衛は同時に、別の場所にも、自費で新田開発を進めた。久兵衛は新田開発を積極的に進める姿勢を示すことで、他の工事を先導したのである。この新田は、後に「久兵衛新田」と呼ばれた。

一八三三年、豊前海岸一帯に十二もの新田が完成した。久兵衛は、その全ての新田開発に技術援助や資金のお世話等で関わった功績者こうせきしやであった。

※日田の農用水路

一八一六年、久兵衛が二十八才の時、天災、地変が続き人々は大飢饉に苦しんでいた。

一八二三年、久兵衛は代官所の命を受け、村人の協力を得ながら約三年の年月をかけ、小ヶ瀬井路を完成させた。

※代官所

江戸時代に江戸幕府直轄ちよつかつの領地りょうち（天領）に設置され、代官はげんが派遣されて統治とうちを行う役所のこと。

※廣瀬淡窓

廣瀬久兵衛の兄。

江戸時代、日田に咸宜園かんぎえんという私塾を開いた。

咸宜園では、「三奪法さんだつぽう」といい、武士・町人・農民の身分、また年齢や学歴にこだわらず平等に最下級からスタートさせ、試験によって進級を定めるといふ評価制度を取り入れた。

ところが、完成の喜びもつかの間、兄・淡窓の不安が現実のものとなった。代官所は、この大規模な工事に関わる莫大な資金を得るために、地元の商人や農民に寄付を求めたり、多数の労働を命じたりしたため、人々は不満をもっていた。そのような苦しい中で完成した新田であったが、暴風雨により堤防が壊され、何度も修理が必要になるところや、海水が入るため米作りができなるところが出てきた。それに加えて、天候不順のため、飢饉となり、人々は食べるものも乏しく、苦しい生活が続いていた。農民の不満は一気に広がっていき、代官所だけでなく、久兵衛にも向けられていった。

「私たち貧しいものから、お金を集めて働かせ、自分たちだけ、いい思いをしているにちがいない。もう、がまんできないぞ。」

この騒動により、代官所の責任者は、取り調べのため江戸に戻された。久兵衛もまたこの騒動により、自宅での謹慎を命じられた。

淡窓は、久兵衛のことが心配になり、自宅をたずねた。淡窓は、つぶやいた。

「人々のために自分のお金を使い、毎日毎日、働いてきた久兵衛が、皆からうらまれるというのは納得がいかないものだ。」

この時、久兵衛は、淡窓を見つめ、静かに語り始めた。

「これだけ凶作が続けば仕方のないことです。私は、飢えで苦しむ人々に、お粥をふるまいたいと思っています。自分が悪かったと認めるわけではありませんが、わずかでもできることをしたいのです。」

久兵衛は、飢えに苦しむ人々にお粥をふるまい続けた。しかし、お粥をもらっても、「わたしたちの怒りを沈めるための演技に決まっている。だまされないぞ。」

と、久兵衛のことを悪く言う人もいた。それでも久兵衛は、お粥をふるまい続けたのであった。自宅での謹慎が、ようやく解けたのは、騒動が起きてから約七ヶ月後のことだった。久兵衛が私利私欲のために働いたのではないと、皆に理解されたのである。



久兵衛は、この他にも大分県内に多くの業績を残している。その一つが府内藩の財政改革である。

久兵衛は、府内藩（大分市）からの大きな仕事を依頼され、三十年にわたり、大分市に移り住んだ。そして、府内藩の財政改革の仕事と机張原・庄ノ原（大分市）の新田開発や農業用水路の工事に懸命に取り組んだのである。

一八七〇年に府内藩での仕事が終わわり、久兵衛は、ようやく故郷の日田に戻った。翌年、八十二歳の生涯を終えた。

「呉崎新田」や「久兵衛新田」など、久兵衛の働きによりできた多くの新田は、今も人々の暮らしを支え続けている。

「農業水利偉人伝①広瀬久兵衛」より
大分県農林水産部農村整備計画課作成

